

中国とどう付き合っていていくべきか

体験的対中外交論(その1)

草 づれ づれ 和 令

外交評論家・元外交官

金子熊夫

kaneko@eeecom.org



昨年来、新型コロナウイルスの感染拡大に関連して、中国に対する厳しい批判が、かつてないほど国際的に高まっています。特に日本は地理的に近く、大きな影響を受ける立場ですから、中国問題は政治家や外交官だけに任せないで国民で真剣に考える必要があります。

今回中国は、いち早く国内のコロナ鎮圧に成功したことを誇示しただけでなく、各国がコロナ対策で忙殺されている隙に、まるで火事場泥棒の如くに、南シナ海や東シナ海(尖閣諸島周辺)に進出するなどの実力行動に出ました。そのことを国際的に批判されると聞き直り、自国外交官に対し、徹底的に反撃せよ、恐縮したような姿勢は一切示すなと訓令を発し、これを彼ら自身「戦狼(せんろう)外交」と呼んでいます。卑近な表現をすれば、まさに「盗人猛々しい」というほかありません。

最近では、中国は国産ワクチンを大量に外国に輸出し、それを勢力拡大の手段に使っていると思われる節があります。「一带一路」政策はそのための隠れみみという見方も、決して的外れではありません。

特に今年には、中国共産党の創設100周年で、習近平指導部は今年を重要な節目の年と位置づけています。これからさまざまな強引な手を打ってくるでしょう。その都度、一喜一憂し過剰反応することなく、中国の出口を冷静に見極める覚悟が肝要です。その時に必要なのは、中国を、そして日中関係を、長い歴史の流れの中で大局的にかつ多面的に把握することです。

吉田元首相と加藤紘一君の思い出

30年に及ぶ外交官生活の中で、中国問題だけを特別に担当したことも、北京や上海などに長期在勤したこともありません。実は、外交官試験に合格した後、最初の任地を選ぶ時に、中国を選ぶこともできたと思いましたが、そうはせず、米國を選みました。正直なところ、中国には全く魅力を感じていませんでした。当時は毛沢東の全盛時代で「共産中国」のイメージはいかにも暗かった。日中間に国交は無く、北京に日本大使館は存在しなかったため、中国を知るためには台湾で勉強するしかありませんでした。台湾に行く気にはとてもなれません。やはり欧米の先進国に行って華やかな生活がしたいという気持ちが強く、中国(台湾)勤務は、「貧乏くじ」を引くようなものであったと内心思っていました。

実は、最初の海外赴任に先立つて、私たち同期生十数名はそろって大磯に行き、外務省の大先輩である吉田元首相を表敬訪問しました。その時、元首相は上機嫌で、おもしろいトウモロコシを馳走してくれました。最後に訓示のような形で教分だけ話された中で、諸君、



吉田茂氏

中国問題は大事だから大いに勉強したまえ」とほつりと言われたのを記憶しています。

理由は詳しく語られませんが、若き日に通算10年近く中国各地に勤務し、苦勞した経験があるだけに、中国には特別の思い入れがあったようです。戦後、米軍占領下の日本で長年首相を務め、サンフランシスコ平和条約に署名(1951年)し、同日、日米安保条約にも署名した元首相としては、日本外交の基軸たる日米関係を、自分自ら基礎固めをしたが、日中関係は手付かずだ、だから諸君がしっかりとやってくれという叱咤(じった) 激励の気持ちだったのでしょう。

(2面に続く)

令和つれづれ草



金子熊夫

そうした吉田さんの期待に添えて、同期の中で一人だけ中国語の研修を命じられ、台湾に行った人がいます。後年外務省で10年近くも中国国内は大荒れに荒れましたが、加藤君の中国語は基本的に一貫していたように思います。

田中角栄首相の訪中(72年)により日中関係が正常化してからは、彼は師匠の大平正芳外相(後に首相)の右腕として対中外交にまい進し、そのため日本国内では一部から「親中派」「媚中派」とみられた時期もありましたが、彼は生涯日中友好親善のために尽くしたと思います。

中国とどう付き合っていくべきか

その頃彼がよく言っていたのは「10億の国民を飢えさせず、腹いっぱい食わせるのは、それだけでも大変なことだ。それを共産党は何とかやっている」とのことです。それ

私の最初の中国訪問

一方、私自身は、ワシントンからいきなりベトナム戦争中のサイゴン(現ホーチミン市)へ赴任し、そこで大変な目に遭いました(後日詳しくお話を予定)。68年秋に久しぶりに帰朝。本首

故加藤紘一氏

でいろいろな部署を経験しましたが、直接中国を相手に仕事をやる機会はほとんどありませんでした。

京飯店にチェックインしましたが、特別貴賓室を用意してくれていたのにはびっくり。

その部屋には、直前まで、社会党の成田知巳委員長が宿泊していたとのことで、室内の調度も一流品。食事は本格的な宮廷料理で家族も大満足。

その後暇ができたので、特別の許可をもらい、市内の名所六環明の十三陵(など)を見物したあと、八達嶺から万里の長城に登りましたが、そこでも、大勢の人だかりでした。特に妻と長男は、日本の普通の女性のように赤やピンクの服装でしたが、それがよほど珍しかったらしく、行く先々で大群衆に包囲され、しげしげと見つめられたのには閉口しました。妻も、これほど多くの観衆の目にさらされたことは今まで一度もないと聞いていました。

日中外交正常化の翌年、本省国連局で地球環境問題を担当していた私は、日本政府からの派遣職員として、新設の国連環境計画(UNEP)事務局に赴任してました(前回の本欄参照)。事務局本部はスイス・ジュネーブにありましたが、約1年で、国連総会決議

により本部がケニアのナイロビに移転したので、私も家族(妻と1歳の長男)とともに移動しました。そこで在勤中の75年春、所用で中国に出張することになり、妻子同伴で、生まれて初めて中国の地を踏み踏みました。北京空港に着いたときは夕方で、空港ビルは狭く、薄暗く不安を感じたほど。毛君という若い通訳の案内で、どこにか天安門広場近くの有名ホテル「北

京飯店」にチェックインしましたが、特別貴賓室を用意してくれていたのにはびっくり。

その部屋には、直前まで、社会党の成田知巳委員長が宿泊していたとのことで、室内の調度も一流品。食事は本格的な宮廷料理で家族も大満足。

同じような委員会は、アジア太平洋地域の主要国にできており、その上に大平洋経済協力会議(P.E.C.C.)という大きな組織があり、毎年いざなわれるが、加藤君が開幕される仕組み。たまたま88年は日本の当番で、大阪で開催されることになっていたので、私はその準備に没頭していましたが、一つ大きな問題に直面しました。それは、それまで中国を代表していた台湾に加えて、中国(P.R.C.)を正式メンバーとして加盟させるかどうかで、いわゆる「二つの中国」問題がもたらしたもので、調整に苦労しました。大来委員長と私は手分けして北京と台北に何度か出向いて交渉した結果、台湾は国家としてではなく、「台北」ということで引き続き参加するという線では何とか落ち着きました。

ところが、大阪会議の直前に各国首席代表が東京で集合し、竹下登首相(当時)に表敬訪問することになり、そうして首相官邸に行つたところ、各国代表を1人ずつ首相に紹介する段になって、中国代表が「台湾代表と一緒にでは困る」と、暗に台湾代表を列から排除してほしいと言い出しました。結局、台湾代表は最後に、あたかもオブザーバーのような形で紹介することになったが、この時ほど、中国が原則や面子に強くこだわる国だということを痛感させられたことはありません。

この原則とメンツへの強いこだわりは、古来中国外交の特徴であり、今後の同国との交際においては特に留意すべき点だと思われまふ。(次回へ続く)



万里の長城での家族写真=1975年

「二つの中国」問題で苦労

その後、1980年代前半には、外務省傘下の日本国際問題研究所(東京都港区虎ノ門)に出向し、約7年間、研究

局長兼所長代行として、外交問題に関する調査研究活動を指揮しました。

ところが、大阪会議の直前に各国首席代表が東京で集合し、竹下登首相(当時)に表敬訪問することになり、そうして首相官邸に行つたところ、各国代表を1人ずつ首相に紹介する段になって、中国代表が「台湾代表と一緒にでは困る」と、暗に台湾代表を列から排除してほしいと言い出しました。結局、台湾代表は最後に、あたかもオブザーバーのような形で紹介することになったが、この時ほど、中国が原則や面子に強くこだわる国だということを痛感させられたことはありません。

この原則とメンツへの強いこだわりは、古来中国外交の特徴であり、今後の同国との交際においては特に留意すべき点だと思われまふ。(次回へ続く)

エネルギー戦略研究会会長、元国連環境計画アジア太平洋地域代表、元東海大学教授(国際政治学)、新城市出身、83歳。